

『信仰と愛』 -ピレモンへの手紙 1～7節-

1. 概要

このピレモンへの手紙はパウロからピレモンに宛てて書かれた手紙です。これはパウロの手紙の中では一番短い1～25節までの手紙です。短い手紙がなぜ聖書の中に含まれているかと言いますと非常にこの手紙が美しい手紙だからです。そして、パウロにとっては非常に難しい立場にありました。

使徒の働き28章の最後のところに、パウロはローマで2年間、自費で借りた家に住み、訪ねて来る人たちを皆迎えて、主イエスのことを教えたとあります。その時に書かれました。なぜ書かれたのかというと、コロサイという町に住んでいたピレモンに、オネシモという奴隸のことで赦しを請うためです。オネシモはピレモンの奴隸でしたが彼のものを盗んでローマに逃げて行きました。しかし、どういうわけかそのローマでパウロに出会い、キリスト者（クリスチヤン）になりました。たとえキリスト者になったといえども、彼は奴隸の逃亡者です。当時のローマ社会には奴隸は多く、こうした反逆行為をした奴隸に対しては厳罰が課せられ、場合によっては処刑されることもあったのです。そこでパウロは、ピレモンの下から逃亡したオネシモを赦し、彼を受け入れてくれるよう手紙を書きました。ですから、この手紙の中には聖書の大きなテーマの一つである「赦し」というものがどのようなものなのかが教えられているのです。今日はこのピレモンへの手紙を通して、神の赦しについて一緒に学びたいと思います。

オネシモは、ピレモンの奴隸でした。オネシモは、ピレモンの家から何かを盗み、ローマへと逃亡生活を続けていました。そこで、主の不思議な巡り合わせによって、囚人パウロに出会い、そこでパウロによって、キリストへの信仰に導かれています。そこでパウロは、コロサイにある教会に手紙を書いただけではなく、ピレモン個人にもオネシモのことで手紙を出しました。オネシモを受け入れてほしい、兄弟として受け入れてほしいというお願いと、執り成しをしています。これが、この、ピレモンへの手紙の背景です。

当時のローマの奴隸制度において、奴隸が主人から逃げたとき、捕まえたら主人は奴隸を死刑にすることができました。奴隸は当時6千万人いたとされ、自由人よりもはるかに多かったので、奴隸の反乱を押さえるためにも、逃亡には厳しい処置が取られていました。ですから、当時の常識からすると、ピレモンがオネシモをそのまま受け入れることは、とんでもないことだったのです。けれども、パウロは今、ピレモンが奴隸を持つ主人である前に、キリストにある兄弟であり、同労者であり、キリストの愛を持っている人であることをまず初めに語って、オネシモを赦してくれることを嘆願しているのです。

そしてパウロは、これが強制されてではなく、自発的なものでなければいけないと言っていますが、これはとても大切なことです。牧者が信徒に対して、「これをしなさい」「あれをしなさい」という命令を出すことはできます。しかし、それによって何かを行なったとしても、神の目からは無意味なものです。聖書には、自ら進んでささげるささげ物について何度も繰り返し、強調しており、強いられてではなく、喜んでささげる者を愛される、と言っています。したがって、ピレモンがオネシモを赦すことも、自発的でなければいけなかったのです。ここにパウロの難しさがありました。

聖書は、創世記から黙示録までどの箇所を開いてもイエス様と出会うことが出来ます。ピレモンへの手紙という短い手紙が聖書の中に含まれているのは、この中にイエス様の美しい姿が隠されているからです。

2. ピレモンの家族（1～3節）

1節から3節に「キリスト・イエスの囚人パウロと兄弟テモテから、私たちの愛する同労者ピレモンと、姉妹アッピア、私たちの戦友アルキポ、ならびに、あなたの家にある教会へ。私たちの父なる神と、主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。」とあります。この手紙はパウロとテモテから、ピレモンに宛てて書かれた手紙ですが、パウロは彼のことを「私たちの愛する同労者ピレモン」と呼んでいます。また、「姉妹アッピア」と、「戦友アル

ピレモンへの手紙 1～7節

「キポ」はそれぞれピレモンの妻と息子の名前ですが、こういう言い方をしているのです。普通だったら、奥さんのアップニアさんによろしくとか、息子のアルキポさんによろしくと書くと思いますが、姉「姉妹アップニア」とか、「戦友アルキポ」というような言い方をしているのです。それはおそらく彼の家がただのクリスチャンファミリーというだけでなく、そこが家の教会だったからでしょう。コロサイの教会はエパフラスという人によって始められましたが、同じコロサイに住んでいたピレモンは信仰に導かれると自分の家を開放し、家の教会を始めていたのです。初代教会には会堂がなかったため、こうした家々で集会や交わりが持たれていたのですが、ピレモンの家はそのために用いられていたのです。彼だけでなく彼の妻も、息子も一家そろってその働きの中心を担っていたのです。だから「姉妹アップニア」とか、「戦友アルキポ」といった表現が使われているのです。彼らは自分たちの生活を守って満足するのではなく、キリストの教会のために自分の家を開放し、さらにそのことに付隨するすべての犠牲を喜んで払っていたのです。こうしたクリスチャンファミリーが、自分たちのできる範囲で、工夫と信仰を持って、このような「家の教会」を生み出していくことが求められているのではないでしょうか。そういう意味でピレモンは、パウロの同僚者だったのです。

3. ピレモンへの賞賛の言葉（4～7節）

次に4～7節までをご覧ください。ここには、パウロのピレモンに対する感謝が書かれています。パウロは今から難しい問題を話そうとしています。それが強制ではなく、相手の自発的愛によって生まれて来なければならないのです。その時に先ずパウロはピレモンをどのように誉めたらよいか。しかもそれは、おべつかではない。真実を語りながらその人を誉めているのです。

4節に「私は祈るとき、いつもあなたのことを思い、私の神に感謝しています。」とあり、パウロの手紙には、いつも、神に感謝していると言って、その手紙の受取人のために祈っていたことがわかります。今のように忙しくないときだから、いや、忙しいからこそ、パウロは祈っていたかもしれません。イエス様ご自身も、父なる神に祈って、夜を明かしておられました。祈る人が、神に用いられます。

5節に「あなたが主イエスに対して抱いていて、すべての聖徒たちにも向けている、愛と信頼について聞いているからです。」とあります。ここは、以前の訳では「それは、主イエスに対してあなたが抱いている信仰と、すべての聖徒に対するあなたの愛とについて聞いているからです。」となっています。パウロは、祈りのうちにピレモンのことを覚えて神に感謝しました。なぜなら、主イエスに対して彼が抱いている信仰と、すべての聖徒に対する彼の愛とについて聞いていたからです。このことをパウロに報告したのはおそらくエパフラスでしょう。この時彼はローマのパウロのもとにいましたが、同じコロサイにある教会のメンバーとして、ピレモンがいかに心から主イエスに仕えているか見ていて、それをつぶさにパウロに報告していました。それにしても、このことを聞いたパウロはどんなにうれしかったことでしょう。伝道者にとって、自分が信仰に導いた人の良い信仰の評判を聞くことほどうれしいことはありません。それは親が自分の子どもの良い評判を聞いてうれしく思うのと同じです。パウロはそれを自分のことのように喜びました。

① 信仰

さて、パウロが聞いたピレモンについての良い評判ですが、それはまず主イエスに対する彼の信仰でした。彼がどのように信仰を持つようになったのかはわかりませんが、多分パウロがエペソで伝道していたとき、何らかのきっかけで主イエスの福音を聞き、信仰を持つようになったのではないかと思います。そして自分の奥さんも信仰に導き、さらには子供たちも信仰に導きました。ただ信仰に導いたというだけでなく、コロサイ4章17節を見ると「アルキポに、「主にあって受けた務めを、注意してよく果たすように」と言ってください。」とあり、このアルキポはコロサイの教会で熱心に主イエスに仕えていたことがわかります。ピレモンとその家族は熱心に主イエスに仕え、人々からとても良い評判を得ていたのです。

② 愛

さらにピレモンは信仰ばかりでなく、愛においてもすばらしい人でした。それはすべての聖徒たちに対する愛で、

ピレモンへの手紙 1～7節

イエス・キリストを信じることによって受けた神の愛です。自分のことだけでなく他の人のことも顧みる犠牲的な愛です。イエス・キリストを信じると、その結果、神を愛するように変えられます。そして、神を愛するように変えられると、今度は兄弟を愛するように変えられるのです。以前は神に敵対し、自分のことしか考えられなかつた者が、主イエスを信じたことによって神の愛を知り、自分のことばかりでなく、他の人のことも考えることができるようになります。神への愛は、必ず他の人への愛へとなります。そうでなければ、その人は神の愛を知っていることにはなりません。神の愛にとどまっているならば、その愛を他の人々に分かち合うように導かれます。

ピレモンには、この神の愛が溢れていました。そしてパウロはこのピレモンの愛から多くの喜びと慰めを受けました。いいえ、それはパウロだけではありません。多くの聖徒たちの心が、彼によって力づけられたのです。彼の存在は、パウロばかりでなく、多くの聖徒たちにとっての喜びであり、慰めであり、励ましであったのです。あなたの存在はどうでしょうか。多くの聖徒たちにとって喜びとなっているでしょうか。慰めとなっているでしょうか。励ましとなっているでしょうか。そのような存在に聖霊を通して私たちもさせていただきたいと心から願う者あります。

③ 良い行い

6節には「私たちの間でキリストのためになされている良い行いを、すべて知ることによって、あなたの信仰の交わりが生き生きとしたものとなりますように。」とあります。ここの個所は、下の引照部分にも書かれているように、「私たちの間で」のところが、「あなたがたの間で」と訳すことのできる異本があります。英語の欽定訳などの翻訳では、この個所は、「キリストの中にあり、あなたの中にある、すべての良いものをよく知ることによって、あなたの信仰の分かち合いが、生きて働くものとなりますように。」となっています。つまり、キリストのうちに、すべての良いものがあり、そのキリストがあなたのうちにおられます。あなたが、このことをよく知ることによって、あなたの信仰が生きて働くようになります、ということです。これは、エペソ人への手紙1章3節に出てくる「私たちの主イエス・キリストの父である神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天上にあるすべての靈的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。」というパウロの祈りと同じものです。彼は、父なる神は、キリストにあって、天にあるすべての靈的祝福をもって祝福してくださいました、と言いました。そして、父なる神、御子キリスト、聖霊がお与えになった祝福を列挙して、こう祈っています。エペソ人への手紙1章17節で「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。」とキリストにある神の祝福を御霊が啓示してくださいますように、ということです。私たちが靈的生活において問題になるのは、私たちの頑張りが足りないからではなく、キリストにある神の祝福がいかにすぐれたものであるか、その力がいかに大きいかを知らないことがあります。ただ知りさえすれば、それを用いることができます。パウロは、ピレモンが、このことをよく知って、さらに信仰が生きて働くように、という願いを話しています。

4. 喜びと慰め

7節で「私はあなたの愛から多くの喜びと慰めを受けました。それは、聖徒たちの心が、兄弟よ、あなたによって力づけられたからです。」パウロは、ピレモンの愛によって多くの喜びと慰めを受けていますが、その理由は、聖徒たちの心が、彼によって力づけられて、元気づけられているからです。自分が力づけられ、元気づけられているから、喜びと慰めを感じているのではなく、ピレモンが良きキリスト・イエスの働き人になっているから、喜びと慰めを感じています。実は、19節に「私パウロが自分の手で、「私が償います」と書いています。あなたが、あなた自身のことで私にもっと負債があることは、言わないことにします。」とあるように、ピレモンは、パウロによってキリストへの信仰に導かれているのが分かります。パウロは、テモテに対してもテトスに対しても同じ思いを持っていたでしょうが、自分をとおして救いに導かれた人が、愛と信仰によって他の人々を励ましているのを見ることができているのです。これほど、励まされることはありません。その時にその人は励ましを受けます。その人は心が聞かれます。その人は尚も愛に生きたいと思います。ここにパウロが人間の心を理解している素晴らしいパウロ自身の魂の取り扱い方があります。

子供を育てる時に家庭の中に色々な問題が起こって来ます。特に幼少期は子どもの心を育む重要な時期です。文部

ピレモンへの手紙 1～7節

科学省が公開している「幼児期までに育ってほしい姿」の中に7つの項目があります。

- ① 規則正しい生活リズムを保つ
- ② 思いやりを持って接する
- ③ 満足感や達成感を得る機会を作る
- ④ いろいろな人と関わりを持つ
- ⑤ 遊びや生活のなかで考える力を伸ばす
- ⑥ 自然と関わりを持つ機会を作る
- ⑦ 美しいものや心を動かす出来事に触れる機会を作る

といことです。これは、幼児期だけではなく私たちにも当てはまるものではないでしょうか。

パウロは、人を育てる時に三つのことを記しました。

- ① 誉める。
- ② 謝る。
- ③ お願ひする。

これが信仰を育てる時のポイントです。パウロもピレモンへの手紙を書いた時に最初にピレモンへの賞賛です。これによって次が読みたくなって来るのです。

ローマ人への手紙 14 章 19 節に「ですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの靈的成長に役立つことを追い求めましょう。」とあります。私たちが教会として集まるとき、このことを追い求めます。平和に役立つこと、お互いの靈的成長に役立つことを追い求めます。相手を励ますために、私たちは集まっています。相手が、キリストにあって成長するために仕えます。キリスト者同士が、お互いことを気遣って、お互いがどうしているのかを知り、思いやり、祈ってあげ、励ますことができているのはとてもすばらしいことです。このようなことのために、私たちが集まっていることを忘れてはいけません。

また、テサロニケ第二 1 章 3 節に「兄弟たち。あなたがたについて、私たちはいつも神に感謝しなければなりません。それは当然のことです。あなたがたの信仰が大いに成長し、あなたがたすべての間で、一人ひとりの互いに対する愛が増し加わっているからです。」とあります。パウロは、テサロニケ人の教会へあいさつを書き送ると、彼らに感謝しています。なぜなら、彼らの信仰が目に見えて成長し、彼らの間で、相互の愛が増し加わり、すべての迫害と患難に耐えながら、その忍耐と信仰とを保っていたからです。この信仰、愛、希望の三つはキリスト者の特質であり、キリスト教信仰において尊ばれているものです。コリント第一 13 章 13 節にも、「こういうわけで、いつまでも残るのは信仰と希望と愛、これら三つです。その中で一番すぐれているのは愛です。」とあります。この信仰と希望と愛こそキリスト者の基本的な特性であって、この三つの特性がそろっていないと健全な信仰の歩みをすることができません。けれども、このテサロニケのキリスト者たちには、この三つの特性が備わっていたのです。

ここには、「あなたがたの信仰が大いに成長し」とあります。この「大いに成長し」という言葉は、原語のギリシャ語は英語の「hyper」の語源になった言葉です。「hyper」とは「超」という意味です。超えているということです。このテサロニケのキリスト者たちの信仰は、まさに限界を超えていました。彼らの信仰は限界を超えるほど目に見えて成長していました。その信仰に対してパウロは、感謝をささげずにはいられなかったのです。パウロがテサロニケに滞在して伝道したのはたった三週間のことでした。そんなに短い期間であったにもかかわらず彼らの主イエスに対して信仰には、目を見張るものがありました。限界を超えるほど強い信仰に成長していたのです。

目に見えるほどの著しい成長であっても、少しずつであっても、神が私たちに望んでおられることは、私たちの信仰が成長することです。ペテロ第二 3 章 18 節には、「私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。イエス・キリストに栄光が、今も永遠の日に至るまでもありますように。」とあります。私たちも主イエスの恵みと知識において成長する者でありたいと願います。